



中高生とともに差別と闘う

「届いていない当事者の声」

吉成タダシ (うずしおランチ代表)



「障がい」の定義とは

前号で、障がい者を取り巻く問題について提起された中学生集会の続きです。

障がいがあるからといって何でも許されるわけではないという意見に対して、ダウン症の弟をもつ大学生のOGが、そんなふうにつまみつぶされてしまっていることがすごくしんどいと語ったことから、次々と発言が飛び出してきました。

「ボクの人権に対する字が低いためにこんなことを言ってしまうのかもしれないのですが。」

「障がい」というのが、ボクにはちよつと定義が分からなくて。

体が不自由だとか、こういうのが極端に苦手だとか、そういうのをいうんだらうなっていうイメージはあるんですけど。それだったら、この場にいる人間みんな苦手なこととか、みんな同じようにできないこととてあるじゃないですか。そういうふうには言えませんが障がいになるし、人間全員に不得意なことあるし、できないことがあるから、そうならば「障がい」という言葉は、ボクは間違っているんじゃないかなって思うんです。このことについて、みなさんの意見を聞きたいです。」

この発想は、簡単なようでなかなかできない、人権学習が進んできた現れの一つのように思います。人としてはみんな同じ、ということですが、現実にはなかなかそうならないことが、このあとの発言に

見えてきます。

「ボクも『障がい』って、何が定義でどこが境なのかなって思ってます。」

ボクのひいおばあちゃんが認知症で、ちよつと前まで家にいたんですけど、けつこう認知症が進んでいて、勝手に家を出てどこかへ行つて、他の人のお世話になったこともあって。

「認知症」って、一応そういう名前があるんだけど、それを時々一般人は「ぼけ」と言ったりして。

病気なんかもなんとか症とか言つて、なんとか障がいとかついているんですけど、それなら、病気の名前とかもどうなのかなって思いました。」

届いていない当事者の声

「ボクが思ったのは、人ってみんな影響されているって思うんですよ。」

たとえば車いすの人とか妊婦さんとかが停める専用の駐車場があるじゃないですか。そういうところには、なんでもない人が普通に停めていくじゃないですか。あれって、それを見ていた子どもは、大人になったら同じことをすると思うんですよ。事実、ボクの友達に親にそんな人がいるんです。

だから、親が何か差別をしていたら、いろんな差別にあてはまると思うんですよ。部落差別とか人種差別とか。親が何か言っていたら子どもはそれが正しいと思つて、それを真似して、どんどんつながついていって、いろんな人が言っていくと思うんですよ。だからそういうことがないよ

うに、ボクはそういう人を反面教師にして、してはいけないなって思つて。

ちゃんとしたルールじゃないけど、常識みたいなものを持つことが大事だと思つてます。でも、その常識が、この世界にも間違つた常識とかがあるから、そんなことに気をつけながら行動していくのが大事なのかなって思いました。」

一般社会には、まだまだ人にやさしくない、人を蔑む、人を排除する雰囲気蔓延しているように思つてます。当事者の声をもつと届き、理解が進んでいけば、状況も変わっていくのかもしれないと思いますが、まだまだ欠けているように思っています。

思い至る人

そのうえ障がいの特性について研究が進み、パッと見てすぐに分らない障がいもたくさん認知されるようになってきました。しかし、なかなかそこまで思い至らないと、ついその人のことを勝手に判断して悪く言ってしまうこともあるように思っています。

今、私の在籍する学校にも、様々な障がいを持った子が支援学級に在籍しています。それこそパッと見ただけに分らない子も多くいます。特に心疾患を持っている子なんかは、一見元気で健康そうに見えます。でも、実際は生きてるのが不思議なほどで、いつ命の危険にさらされてもおかしくない状況です。一日一日

が綱渡りの毎日です。そんな子の

しい実態は、聞かなければ分かりません。にもかかわらず、世の中はよく知らないまま、悪口の対象としてしまう。そして当事者や家族は、息苦しい生活を余儀なくされてしまう。

やはり、もつともつと想像力と、対話する機会を増やし、思い至るようになることが必要だと思わせられます。

中学生集会の醍醐味

「私の妹も自閉症なので言いたいことは分かるんですけど、足を踏まれた子の場合、親の教育が行き届いてなかったなという部分もあるので、ちよつと、ホントに申し訳ないんですけど、彼が全面的に悪いみたいな感じになってるので、そこは違うかなって思いました。すみません」

大学生のOGに対して中学生の女の子が意見しました。これもすごいことです。よく言つたものです。立派です。思つていてもなかなか言えないことはよくあるものです。でもそれが許されるのが、この場です。

本人の人権学習が進んでいけば、年齢を越え、立場を越え、人と人として、互いの思いを素直に述べ合うことができます。もちろん勇気は要るかもしれませんが、それが可能となり許されるのが、この「みんな語り合う人権学習」の醍醐味といえます。

このあと、障がいのある子どもを持つ親の思いが滲み出てきます。